

大学生による自主防災組織の実効性についての検証

熊本市消防局（熊本） 奥村 聡一

本市における自主防災組織は、「自主防災クラブ」という名称の下、小学校区内の「町内自治会」等を基本的な単位として結成されており、100%を目標に結成促進を図っており、すでに結成されている自主防災クラブでは、地域の防災力向上のため、防災訓練や各種研修等を実施している。

本市の年齢別人口の状況を見ると、65歳以上の割合は、18.45%であるが、地域により、大きな偏りがある。

割合が高い地域においては、自主防災クラブの必要性も、比例して高くなるが、こうした地域は同時に、自主防災クラブ員自体の「実態としての高齢化」ということが大きな問題となっている。

前記のとおり、本市の自主防災クラブは基本的に、小学校区内の「町内自治会」等が単位であり、ほとんどの場合、当該地域の全住民がクラブ員となっているが、平常時における訓練や研修等の活動の主体は、「町内自治会の役員」であり、高齢者であることが多く、地域住民への普及啓発も大きな課題となっている。

私が今般勤務したI出張所は、市の中心部から3 kmほど北に位置し、地勢は、丘陵地を南北に走る県道から東西に下り勾配で、県が指定する急傾斜崩壊危険箇所が点在し、狭隘な道路沿いに、一般住宅や公・私営の中低層共同住宅が比較的密集して混在する地域を有している。

人口の状況は、年齢別に見ると、65歳以上の割合が24.20%と、市平均を5.75ポイント上回っている。

特に、I町3丁目では、26.44%と、市平均を7.99ポイント上回っている。（資料1参照）

大規模な災害が発生した際、傾斜地が多く、道路狭隘なこの地域では、地域の住民による、初期の活動が極めて重要であるが、65歳以上が4人に1人を占め、独居の高齢者も多く居住しており、また、自主防災クラブ員自体の高齢化という問題もあることから、安全確保の困難性が大きいとの認識の下、特に、防災訓練等の強化を図り、この地域における効果的な「自主防災のあり方」を模索していた。

その過程において、同地区内に存する、学生数約3,400人のS総合大学と地域防災の接点を見出せないか、効果的な方策はないかということで大学側との接触

も行っていたが、折しも、平成18年1月に、消防庁国民保護・防災部防災課長より、「大学生等の消防団への参加促進について」が通知された。

通知では、若年層の消防団員への参加促進が喫緊の課題であるとして、大学生の基本団員としての参加を推奨しているが、同時に防災への関心が薄い大学生に消防団への参加を促しても困難であることも考えられるとしている。

消防団員という「消防機関」としての学生の参加は、消防団の充実強化に有用であるが、通知も提起しているハードルの高さや、校区を単位として組織している本市の消防分団の活動範囲を考えると、災害時の一つの「地区」内における初期の活動という点から、広範囲であり、適切ではないと考えられた。

一方、自主防災クラブは、消防が主導するといえども、地域住民による自主的な組織であるため、大学生が参加するハードルも低いのではないかと考えられ、また、ウェブ上で検索できる防災に関する意識調査においても、大学生のボランティアに対する関心の高さが表れていることなどから、いわば、ボランティアでもある自主防災クラブには、積極的な参加も期待できるのではないかと考えた。

具体的な参加方法を検討すると、大学は地域に立地しているというものの、物理的に独立しており、また、夜間における災害を想定すると、「大学」そのものの参加というよりも、地域に広く居住する学生の活動が効果的であると考えられた。

地図上に、S大学周辺の危険地域および学生、独居高齢者の居住状況を表すと(資料2参照)、傾斜地に、独居高齢者宅と学生アパートが混在しており、特に学生アパートが多いI町4丁目では、資料1から、65歳以上が15.88%と市平均よりも2.57ポイントも低くなっていることがわかった。

こうしたことから、大学生による自主防災クラブの結成について、大学に持ちかけたところ、大学側としても、地域への貢献は重要な課題であると合意され、学生会的組織である、「学友会」の紹介を受けた。

学友会は、S大学全学生の会であり、代表者の学生に対して趣旨、目的等を説明した結果、賛同を得、3月1日に、「S大学自主防災クラブ」として結成に至った。

今年度からは、4月のオリエンテーション時の、全学生への自主防災クラブの説明にはじまり、市が主催する自主防災クラブリーダー研修や防災訓練への参加。また、今後、地域の町内自治会による自主防災クラブとの連絡体制の確立や合同訓練、危険地域の把握等を計画しており、早い時期の「動ける自主防災クラブ」を目指している。(資料3参照)

S大学自主防災クラブの結成は、大学が所在する地域の地勢や居住の状況から予想される災害危険性の状況から導き出されたものであるが、国内の大災害時に多数の大学生がボランティアとして活動するように、4年間とはいえ、自分が住んでいる地区の災害時に、自主防災クラブ員として活動することについては、動機付けや、地域住民とのコンタクトの場の提供、「お膳立て」等を行うことにより、ほとんど抵抗なく、むしろ、意外なほど積極的に、使命感を持って取り組んでもらっている。

なお、この件については、報道にも大きく取り上げられ、本市の他の大学においても検討がなされているところである。(資料4参照)

地形の状況や高齢化の進展等により、災害発生直後の自主防災力が手薄になることが予想される地域において、今回のS大学の事例が参考になれば幸いである。

S大学周辺と市全体の年齢別人口の比較

市統計資料より

I町3丁目の年齢別人口(3区分)

平成18年1月1日

年齢区分	総数	男	女	割合(%)
総数	2,818	1,348	1,470	—
0～14	328	189	139	11.64
15～64	1,745	859	886	61.92
65以上	745	300	445	26.44

I町4丁目の年齢別人口(3区分)

平成18年1月1日

年齢区分	総数	男	女	割合(%)
総数	636	379	257	—
0～14	47	28	19	7.39
15～64	488	315	173	76.73
65以上	101	36	65	15.88

*S大学生居住のため割合小

I町5丁目の年齢別人口(3区分)

平成18年1月1日

年齢区分	総数	男	女	割合(%)
総数	741	391	350	—
0～14	70	38	32	9.45
15～64	502	284	218	67.75
65以上	169	69	100	22.81

3地区の計(3区分)

年齢区分	総数	男	女	割合(%)
総数	4,195	2,118	2,077	—
0～14	445	255	190	10.61
15～64	2,735	1,458	1,277	65.20
65以上	1,015	405	610	24.20

市全体の年齢別人口(3区分)

平成18年1月1日

年齢区分	総数	男	女	割合(%)
総数	663,754	313,549	350,205	—
0～14	100,914	51,631	49,283	15.20
15～64	440,399	212,884	227,515	66.35
65以上	122,441	49,034	73,407	18.45

本部 S 大学学友会



防災資機材

平常時

組織・連絡体制の整備



避難



消防との連携



救急救護

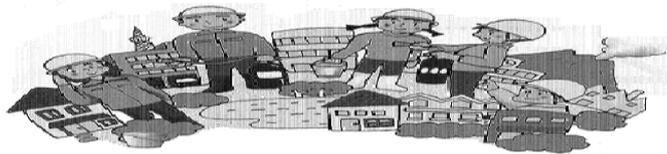
訓練の実施



通報・連絡



消火



災害時

地域と一体となった各種活動



避難誘導



情報収集



通報



救出



誘導



応急手当



初期消火



情報提供



S 大学周辺は

- 学生アパート等が多く、多数の S 大学生が居住している。
- 高齢者が多数居住しており、独居も多い。
- 傾斜地が多く道路狭隘である。
- 災害発生時には、土砂災害を中心に大きな被害が予想される。
- 被害の局限化には、住民による初期の活動が重要である。
- 特に、高齢者の安全を確保するのは極めて困難である。

↓↓↓↓↓

↓↓↓↓↓

S 大学学生による、住民と一体となった組織的な初期の活動は

非常に実効性が高いと考えられる。

↓↓↓↓↓

↓↓↓↓↓

S 大学学生による自主防災クラブ結成！！

□学生だけの自主防災クラブ結成＝熊本市消防局の呼び掛けで実現（写真）

私立S大学（熊本市I町）の学生自治組織「学友会」のメンバーが自主防災クラブを結成し、1日に結成式が行われた。熊本市消防局の呼び掛けに同会が応える形で実現した。同局によると、学生だけの自主防災クラブは全国でも珍しいという。

自主防災クラブは、消防からの資機材提供を受けて災害初期段階で消火、救出などの活動を行う住民参加の自主組織。S大周辺は道路幅が狭い傾斜地で、火災も多発。高齢者世帯も多く、周囲に住む学生約1000人による救助活動は「非常に実効性が高い」（消防局）という。



結成式では、中央消防署の中田義行警防一課長から、学友会代表で自主防災クラブの会長となる向江勇喜さん(20)にクラブ旗が手渡された。向江さんは「訓練に参加して技術を高め、地域の人たちに活動を知ってもらいたい」と意気込みを語った。(了)

写真：消防局職員からクラブ旗を受け取る、防災クラブ会長の向江さん（左）＝1日午前、熊本市I町のS大学（須永野歩撮影）

※ 「S大学」、「I町」については記事を修正しています。

S大生が防災クラブ結成、消防や住民と避難訓練など

S大（熊本市I町）の学生が自主防災クラブを組織し、1日、同大で結成式があった。消防署、地域と一体となって活動を進める。結成を呼びかけた熊本市中央消防署は「学生による学生だけの自主防災組織は県内初で、全国的にも珍しい」と話している。

同大が位置するI町地区は傾斜地が多く、65歳以上の人口割合が市全体の平均を上回っており、災害発生時の対応が課題の一つ。一方、同大周辺には1000人以上の学生が住んでおり、この“若い力”を防災に生かそうと、同消防署の奥村聡一・I出張所長が今年1月、結成を呼びかけたところ、地域貢献策を模索していた学生側が賛同し、学友会メンバー約30人を中心に結成された。

今後は、消防署や地元住民と共同で避難訓練などを行うほか、他の学生にも参加を呼びかけ、活動の輪を広げていく方針。

結成式で、同消防署の中田義行・警防1課長からクラブ旗と防災用具を受け取った学友会代表で2年の向江勇喜さん（20）は、「クラブ員一人ひとりの防災意識を高め、より効果的な活動をしたい」と決意表明した。

結成式に出席した地元自主防災クラブ会長の板倉武さん（67）は「非常に心強い。今後、協力して活動を進めたい」と期待。2年高木博樹さん（22）は「災害はいつ起こるか分からない。少しでも地域の皆さんの役に立てれば」と話していた。

（2006年3月3日 読売新聞）

※ 「S大学」、「I町」等については記事を修正しています。

自主防災クラブ：若い力で地域を守る S大生が結成、災害時に初期活動 /熊本

S大学（熊本市I町）の学生が「自主防災クラブ」を結成。1日、同大学で結成式があった。「自主防災クラブ」は災害時、地域住民が助け合って消火・避難・救護などの初期活動をし、災害の被害を最小限に抑えようという組織。熊本市中央消防署は「大学生による自主防災クラブは県内初。全国的にも珍しいのでは」と話している。

S大学周辺は傾斜地で道幅も狭く、さらに住民の4人に1人は高齢者で1人暮らしの高齢者も多い。災害時の被害を抑えるため、同署が同地域に住む学生中心の「自主防災クラブ」の設立を提案。以前から「なんらかの形で地域に貢献したい」と考えていた同大学の学友会がこれに応じた。

結成式では、学友会代表の同大2年、向江勇喜さん（20）が同署の中田義行・警防1課長からクラブ旗を受け取った。ロープやヘルメット、誘導旗やバケツなどの資機材も贈られた。

向江さんは「防災訓練に参加して技術を高め、より効果的な活動を行えるようにしていきたい」と話していた。【伊藤奈々恵】

毎日新聞 2006年3月2日

※ 「S大学」、「I町」については記事を修正しています。